

『稻穂の夢』

プロローグ

西暦 2157 年。地球の空は灰色の靄(もや)に覆われ、かつて青かった空の記憶は、もはやデジタルアーカイブの中にしか存在しない。

私、リン・タカハシは、世界食糧機構の記録管理官として、人類が蓄積した膨大な食糧生産データの維持管理を担当している。現代の食糧は、すべて「アグリ AI」によって生産される。効率的で、安全で、安定している。だが、私たちの食卓に並ぶ「ニュートリゲイン」と呼ばれる栄養補給食は、生命を維持するには十分だが、かつて人類が「食の喜び」と呼んだものとは無縁だった。

その日、私は古いデータセクションの整理作業中に、奇妙なデータの塊を発見した。

「新潟県農業記録データベース」

ファイルサイズは膨大で、手書きの記録、音声データ、土壤サンプルの化学分析結果まで含まれていた。なぜこれほどの労力をかけて、一地域の農業記録が保存されていたのか。

第一章: 失われた記憶の扉

私はアーカイブ AI「ヒストリア」を起動し、データの解析を依頼した。

「このデータベースには、1920 年から 2024 年までの 104 年間にわたる、『コメ』という穀物の生産に関する記録が含まれています。日本列島の北西部に位置した新潟という地域は、AI 支援なしで、自然環境と対話しながら作物を育てていました」

ヒストリアが映像を展開する。広大な緑の平原。水を湛(たた)えた田んぼの中で緑の苗が風に揺れている。遠くには雪を頂いた山々。空は信じられないほど青い。

「これが.....地球？」

私は息を呑んだ。現代の私たちが知る地球は、気候制御ドームの下でかろうじて居住可能性を保っている惑星だ。映像が変わる。帽子をかぶった老人が、腰を屈めて田んぼの中を歩いている。

「『草取り』という作業です。この農家、ワタナベ・ケンジ氏は、当時 82 歳。60 年以上、この作業を続けていました」

老人の顔には穏やかな笑みが浮かんでいる。その目は、田んぼを見つめながら、何かを確かめるように細められている。

「彼は五感を使って、作物の状態を判断していました。AI 支援なしで、です」

私は言葉を失った。だが、この老人の表情には、私が見たことのない何かがあった。それは愛情、とでも呼ぶべきものだろうか。

第二章: データの向こうの人生

データベースには数百人の農家の記録が含まれていた。それぞれの記録は驚くほど詳細で、人々の日常が克明に記録されていた。

ある日、私は1995年の女性農家、サトウ・ミチコ氏のインタビューを見つけた。

「秘訣はね、田んぼに話しかけることなの。笑われるかもしれないけど、私は毎朝、『おはよう、今日も頑張ろうね』って稻に声をかけるの」

その声は温かく、どこか誇らしげだった。

「ヒストリア、これは迷信？」

「サトウ氏の発言の真の意味は、科学的効果よりも、彼女自身が作物と向き合う姿勢にあると考えられます。彼女は毎日、田んぼを観察し、変化に気づき、必要な対応を取っていました」

私は、現代の食糧生産システムを思い浮かべた。私たちはAIに任せきりで、食べ物がどのように育つのか、考えたこともない。特に印象的だったのは、「雪」に関する記録だ。

「雪は天然の貯水池なんだ。春になって雪が溶ける水が、ゆっくりと田んぼに流れ込む。この水がまた、ミネラルたっぷりでね。新潟の米が美味しいのは、この雪解け水のおかげなんだよ」

水質データを分析すると、信濃川や阿賀野川の水には独特のミネラルバランスがあり、それが米の味と栄養価に直結していた。再現不可能な、複雑な自然システムの産物だった。

第三章: 味という記憶

ある日、私は「官能評価データ」を見つけた。数千人の人々が米を食べた際の感想が記録されていた。

「粒がしっかりしている」「甘みがある」「もちもちした食感」

私は混乱した。現代の栄養補給食には「味」という概念がない。ヒストリアが、ある家族の食卓風景を再現した。母親が炊き立ての米をお櫃(ひつ)に移し、湯気が立ち上る。

「いただきます」

一口目を口に入れた瞬間、子供たちの顔が輝く。

「今年のお米、美味しい！」

「今年は天気が良かったからね。おじいちゃんが丹精込めて作ったお米よ」

その会話を聞きながら、私は胸の奥が温かくなり、同時に何かが欠けている空虚さを感じた。新潟には、米を使った様々な料理の伝統があった。特に「笹団子」という菓子の記録が興味深かった。祖母と孫が一緒に団子を作る映像で、老いた手が若い手を優しく導いている。

「昔から子供の健康を願って作るものなの。あなたが元気に育つように、っていう気持ちを込めて作るのよ」

私は涙が頬を伝うのを感じた。この記録の中の人々が持っていた何か——つながり、意味、愛情——が、現代の私たちには完全に失われていることが、痛いほどわかった。

第四章:失われた未来

記録を読み進めるうちに、新潟の米作りがどのように消滅していったのかを知った。

2030 年代、気候変動が加速し、農業は壊滅的な打撃を受けた。2040 年、世界食糧機構が設立され、アグリ AI による食糧生産システムが導入された。伝統的な農業は「非効率」として放棄されていった。

最後の記録は 2047 年のものだった。ワタナベ・ケンジ氏の孫、ユウタ氏が祖父の田んぼを最後に訪れる映像だ。荒れ果てた田んぼ。ユウタ氏は膝をつき、土を手に取る。

「じいちゃん、ごめん。守れなかった。でも、あんたが教えてくれたことは忘れない。米作りはただの仕事じゃなかった。それは、自然と生きること。過去とつながり、未来に渡すことだった」

彼は懐から小さな袋を取り出す。中には、わずかな米粒が入っている。

「これだけは持っていくよ。いつか、またここで米が作れる日が来るかもしれない」

第五章:種を蒔く

私は新潟の米に関するデータを、現代の食糧生産データと比較した。あらゆる指標において、アグリ AI の方が優れていた。だが、一つだけデータ化できない要素があった。**「文化的価値」**だ。

私は世界食糧機構の上層部に報告書を提出し、「ハイブリッドアグリカルチャー」を提案した。反対意見が噴出したが、試験的に小規模なプロジェクトが認可された。

私はワタナベ・ユウタ氏が保存していたコシヒカリの種粒を、世界種子銀行から取り寄せた。わずか 100 粒。だが、その中には 110 年の歴史が詰まっていた。気候制御ドームの一角に実験区画を設け、私は生まれて初めて、土に触れた。

柔らかく、温かい。私は一粒一粒、丁寧に種を植えた。

「おはよう。今日から、よろしくね」

サトウ・ミチコさんがそうしていたように、私も稻に話しかけることにした。

第六章: 実りの季節

一週間後、小さな緑の芽が土から顔を出した。実際に目の前で生命が誕生する瞬間を見ることは、データとはまったく別の体験だった。私は毎日田んぼを訪れ、稲の成長を観察し、草取りをした。

プロジェクトの噂は機構内に広がり、若い技術者が実験区画を訪れた。

「これが、米？」

「触ってみる？」

彼女は恐る恐る手を伸ばし、稲の葉に触れた。

「柔らかい……生きてる」

夏が過ぎ、秋が訪れた。稲は黄金色に色づき、重い穂を垂れている。収穫した米はわずか 35 キログラム。効率という点では完全な失敗だ。

だが、その米を初めて炊いた時、私は涙が止まらなかった。炊飯器の蓋を開けると、真っ白に輝く米粒が現れ、ほのかな甘い香りが広がる。ひと粒を口に入れると、甘みが広がる。確かに、味がある。

これが、新潟の人々が守ってきた味なのか。失われた文化、忘れられた喜び、そして食べ物が単なる栄養補給ではなく、人生の一部だったという事実。そのすべてが、この一粒の米に込められていた。

エピローグ

それから五年が経った。

世界各地で「文化的農業プロジェクト」が展開されている。AI の効率性で基本的な食糧を確保しつつ、一部で伝統的な農業を復活させる。

私は今日も田んぼに立っている。二度目の田植えだ。今回は十人の仲間が一緒に。田んぼの向こうには気候制御ドームの壁が見える。灰色の空も、失われた自然も、まだ戻ってはこない。

だが、私たちの足元には、緑の苗が風に揺れている。その小さな命の中に、過去の記憶と未来への希望が宿っている。私は遠くの山々——今は存在しない、かつての新潟の風景——を思い浮かべる。

「おはよう、今日もよろしくね」

私は稲に語りかける。風が吹き、稲が応えるように揺れる。

そう、これが食の未来だ。AI と人間が、データと感性が、効率と文化が共存する世界。

新潟の稲穂が見た夢。それは、決して失われることのない、人間の記憶の中で永遠に実り続ける。

